

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター

カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座：02260-9-2305
名義：カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座：00170-5-95979
名義：カリタスジャパン

3 月末は年度替わりの時です。皆さまの周囲にも、去る人あり、迎える人あり、あるいはご自身が転勤という方もいらっしゃるかも知れません。この 3.11 で、東日本大震災から満 7 年を迎えます。カリタスベースにも、少しずつ変化の波が押し寄せてきました。町長さん以下町の職員の多くを亡くした大槌町に入り、「私たちのような外部から来た者がいなくなるのが正常の状態」と心がけ、支援活動をしてきたカリタス大槌ベースが閉所され、活動を地元を引き継いでいきます。さらに、福島県いわき市のサポートステーション「もみの木」も、今後は「さいたまサポートセンター」を拠点に、支援活動を続けていくことになりました。その 2 つのベースについてご紹介いたします。

新生・大槌町の歩みに期待して

カリタス大槌ベース 片岡 英和

2018 年 3 月末をもってカリタス大槌ベースはその活動を終えることになりました。2011 年 12 月 13 日に岩手県大槌町の「ビジネスホテル寿」をベースにその活動を始めて 6 年 5 か月に及ぶ活動でした。

未曾有の災害があった 3.11、その時私は長崎にいて、仕事が終わりに帰宅したのち見たことのないような映像でその事実を知りました。ビール片手にゆっくり晩酌でも、と考えながらテレビをつけたところその映像が目飛び込んできて、そのまま何も飲むこと、食べることも忘れ、長い時間映像にくぎ付けになっていたことをよく覚えています。この時には被災地へ出向いて、その後 7 年近く住むことになるとは想像もしていませんでした。

その後、縁あって長崎カトリックセンターでお手伝いをしていたのですが、初代ベース長の古木眞理一神父様（2016 年 6 月 8 日帰天）からお誘いがあり、大槌ベース立ち上げのため 2011 年 8 月に大槌町入りしました。その時の光景は文章では到底表せない、想像を絶するものでした。そこから 4 度、長崎と大槌を行き来して、12 月のベース開所へ何とかこぎつけることができました。

ベースが開所すると多くのボランティアの方々が被災地を訪問され、様々な活動へ従事していきました。当初多かったのは町の清掃活動でした。ボランティア活動というと、当時はメディアの影響もあって、瓦礫の撤去などをイメージして来るボランティアが多かったのですが、ベースの活動を開始した時にはほとんどが撤去されていた状態でしたので、それに付随した側溝上げなどの清掃活動が多かったのです。それと並行するように社会福祉協議会のお手伝いも積極的に行いました。当時多くのボランティアが被災地を訪れ、また被災者からのボランティアの要請も多く、社協の方々も疲労困憊しているのが見て取れました。誰もが経験したことのないような災害の復興へ向かうわけですからそれも当然の話でした。社協の仕事の流れが少しでも円滑にいくようにお手伝いができたのではないかと思います。

そんな活動を行う中、ベース内でも様々な問題がありました。ボランティアの皆さんは「被災地へ出向いて被災者のためにお手伝いをしたい」という強い思いをもって来られます。そんな方とベースの活動方針のずれがあり、理解してもらうのに苦労した覚えがあります。



【仮設での活動】イベント（バーベキュー） 山口青少年グループによる草とり

大槌ベースの最終目標は、「一日も早く大槌ベースを閉所すること」でした。これには当初のスタッフも理解に苦しんだものでした。「開所の時からどういうことなんだろう」と、初代ベース長に質問したことがあります。その時の答えは、「外部から支援団体が来ている状態は通常の生活ができていないということ。我々が邪魔だなと感じてもらえた時こそが自立して復興へと向かうタイミング」ということでした。今でこそ、なるほどと感じますが、当時はやはり頭をかしげるばかりでした。それでも、とにかくいち早く自立の方向へと向かうためのお手伝いをしようとなり、ベース独自の活動としてはイベントのみを行い、社協から依頼のあった事項だけを活動の内容としていました。ボランティアさんとのずれはここで起こります。とにかくお手伝いをしたいと思って現地に来ているわけですから、「手伝ってほしい」と声をかけられればお手伝いをしたいわけです（スタッフも当時はそうでした）。しかし、そこを我慢して社協へ依頼を出していただき、社協の判断を一度間に挟んで、そこから依頼があれば行っていました。ですから、住民の方から直接ベースやボランティアにお願いが来ても、一度は断らなければならず、皆、大きな葛藤を感じていたと思います。かくいう私もそうでしたが、今となってはその真意に少しは触れることができたのかなと思います。こういった感じで当初から活動をやっていたので、『他の団体とは少し違った団体』と大槌では認識されていたと思います。しかし他の団体よりも、町民はもとより大槌町役場や社協、教育委員会などとは強いつながりを持てたと自負しています。

活動内容は、当初の清掃活動から仮設住宅訪問へと移っていきました。とにかく人と寄り添い、「まだボランティアもここ大槌へ来ていますよ」と被災者の方へお知らせするのが一番の目的でした。ボランティア希望者から「そちらへ行きたいのですが、何の特技もなくお役に立てるのかわかりません。」といった問い合わせが多くありました。



2011 年当時のベース、寿ホテル



2012 年 11 月 ベース周辺 北面の壁「希望の樹」



南面の壁「希望の虹」



2014 年 2 月 寿ホテル解体

※2012 年 8 月、ベース(寿ホテル)の北面・南面の壁に、台湾壁画隊によって色鮮やかな壁画が描かれた

当初、こういうこともありました。傾聴などを専門にしている方が仮設を訪れサロンを開いたところ、なかなか話が弾まない。しかし、特に、資格など持っていないボランティアが開いたサロンでは、皆さん楽しそうに談笑していたそうです。一概に言えませんが、特技など保有していなくても寄り添うことはできるのです。まずは現地へ赴いて、その人たちと触れ合い、被災地の情報を多く広めることは誰でもできることです。そういった観点から、お茶っこサロンは、またとない人と人の交流の場になっていきました。初年度から続けていたお茶っこサロンは、今現在も続いています。大槌ベース閉所後は、その情報を地元社協へ引き継ぎ、役立ててもらうことになりました。



仮設住宅集会所での活動

子ども支援活動にも力を注いできました。多くのボランティアとともに、学童や子ども支援施設などへの協力を行ってきました。夏には大槌だけではなく釜石、大船渡といった地域の子どもたちとの合同キャンプを行いました。これはいろいろな地域で活動が続ける各カリタス関連の団体の協力があって実現することができました。ただ、活動最後の 2017 年には、大槌ベース独自でイベントを行いました。宿泊を伴うキャンプを企画してもよかったのですが、それはカリタスベースの連携があってできた企画なので、大槌ベースが閉所してしまうとその後の継続を期待できないと思われました。地元の施設、地域の共同体などでも可能なものはないかと思案した結果、日帰りの海イベントを選択しました。これは隣の山田町において海におけるレジャー（バナナボート、カヌーなど）を体験するというものです。震災以来、地域の共同体の活動がほとんどといっていいくらいありません。子ども会などで企画可能という点も考慮に入れました。来年以降も選択肢の一つとして残ってくれればと考えています。



学童支援



子どもキャンプ

軸としてきた活動は以上ですが、その他各種イベントにも取り組みました。開所当時は各地から支援物資として本当にいろいろなものがベースへ届けられていました。岩手沿岸 4 ベース（宮古・大槌・釜石・大船渡）合同イベントで各地を回り、販売会などで使わせていただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。現地で被災者の方から感謝を受けるたびに、申し訳ない気持ちになっていました。私たちはベースの運営の任を受け、大槌へ来ました。本当に多くの方の支援を受け、その活動を行ってきました。感謝を受けるのは、支援を続けてくださった多くの方々だと思っています。本当にありがとうございました。この機会をお借りして、感謝の意を伝えさせていただきます。

最初に書いた通り、大槌ベースは活動を終えますが、本当の復興への歩みは始まったばかりです。町内の主な土盛り工事は終わり、建築物も着々と建ってきています。建物ができている光景を見て「復興した」と感じるのは間違いだと思っています。それは人が生活を始める基盤を作っていることにすぎません。実際にそこへ人が帰ってきて生活を始められるかどうか、また生活していけるかどうかなどまだまだ問題は山積みです。しかしここから先は、大槌で生きていく人たちが自ら作り上げていかなければなりません。震災により、町民人口の約 1 割（1,300 人弱）を失いました。それから人口の減少が止まらず、現在は 1 万 2,000 人（震災前 1 万 5,000 人）です。町方と呼ばれる大槌町の中心部は、住宅地として整備されていますが、まだ多くの空き地が存在します。そこへ帰ろうとする人が減少していることの現れです。これからの街づくりのために定住促進の計画もされ、新生・大槌町への歩みはゆっくりですが着実に進んでいくでしょう。次に大槌町を訪れるときのことを今から楽しみにしています。

町民・ボランティアを問わず、大槌での出会いは、私の貴重な財産となりました。大変な感謝の気持ちでいっぱいです。最後にこの機会を与えてくださった古木神父様に感謝の意を添えて。



2017 年 3 月までボランティア宿舎として使用していた建物（大槌町桜木町）

「言葉を拾う」

～いわきサポートステーション「もみの木」閉所を前に～

いわきサポートステーション「もみの木」ベース長 朝尾光二

さいたま教区サポートセンターでは、2018 年 3 月末日をもって東日本大震災被災者支援の活動拠点であるいわきサポートステーション「もみの木」ベース（以下、「もみの木」という。）を閉所します。

経過

さいたま教区では、東日本大震災発災直後の 2011 年 3 月 18 日にさいたま教区サポートセンターを設置し、22 日には、茨城県内の被災小教区である鹿島、水戸、日立にサポートステーションを設置して助祭を中心に被災地での支援活動を始めました。

翌 23 日には、福島県いわき市内の小名浜教会に協力して、いわき市内での支援活動を開始しました。

25 日には、聖公会小名浜教会とも連携して支援物資提供等の活動を開始。

28 日からは仙台教区サポートセンターに人を送り、塩釜、石巻、釜石のベースを拠点に瓦礫処理などの復旧、復興活動に取り組んできました。

30 日には、いわき教会のご理解の下、いわき市内の「湯本教会」に支援活動拠点としてのサポートステーションを立ち上げ、避難所への支援物資の提供とともに、傾聴活動の必要性から傾聴ボランティア活動にも着手しました。その後は、いわき市行政、いわき市内のボランティア団体、そして、いわき、湯本、小名浜の各教会の方々と力を合わせ、避難所への訪問、支援物資の提供、被災された方々への傾聴活動を展開しました。

また、高松教区の皆さんや、さいたま教区内には多くの外国人が住んでいます。ベトナム人、ブラジル人、フィリピン人等の多くのグループが、避難所を訪問しては積極的に炊き出し活動を展開しました。彼らが避難所を訪問する度に、被災者の皆さんは、「こんなにたくさんの国の人が私達を心配して来てくださった！」と感激していました。

以後、2011 年内は湯本教会をベースとして、次々と整備される応急仮設住宅への訪問活動、支援物資の提供活動に取り組んできたところです。



2011 年 10 月 支援物資の配布



多国籍の子どもたちによる踊りの披露

「もみの木」での活動展開

その後、10 月には「もみの木」ベース建設に着手、年末の 12 月 23 日に開所式を迎える運びとなりました。

以後、もみの木ベースでのカフェスペースの提供、手芸などの趣味を楽しむ場の提供、料理教室のほかコンサートなどのイベントを開催してきました。さらに、さいたま教区の呼びかけに応じた教区内小教区から派遣される信徒により、いわき市内の応急仮設住宅を訪問して「出張交流カフェ」と称してのお茶っこ、手芸作品作りなどを通じての憩いの場、語らいの場の提供を行ってきました。

この活動展開の原型は、2012 年から 2014 年 3 月までの 2 年間、もみの木ベース長を引き受けて下さっていたホアン神父様ともみの木ベースに常駐したベーススタッフが、仮設住宅自治会、関係地方自治体の出張所や社会福祉協議会等を廻りながら作り上げてくださったものでした。

【もみの木でのイベント風景】



本格インドカレー作り



エコクラフト教室



ボランティアによるフラダンス披露

2014 年からベース長として

さて、私はと言うと、東日本大震災から 3 年も経った 2014 年の 3 月、正に周回遅れの様な感じで「私でも、何かお手伝い出来ることありますか？」と、さいたま教区に伺うと、複数の小教区で働かっていたホアン神父様の多忙が極まっていた時期でもあって、「あっ、それじゃ、コッチ！」と言う訳で「もみの木ベース長」にさせられた次第です。

活動内容を聞いていくと「おいしい、チョト、待ってくらんショ！」と。「そんな、ビミョーな仕事、いきなり？」と思ったものです。そもそも、カリタス方面の活動はサッパリ知らないし、テキトーにサラリーマンをやっていた中年おじさんで、もとより手芸など出来る訳はないし……。しかし、コチラから持ち掛けた話ですから断る訳にはいかない状況で、不安を抱えながらも引き受けざるを得なくなってしまい現在に至っています。

【出張交流カフェ風景】



生け花講習会



たくさんの笑顔が溢れた腹話術



男性の参加が定着した将棋



ボランティアとともに折り紙作品作り

2014 年 4 月から、単身赴任の様な形態で埼玉県の熊谷からもみの木ベースに来ては、カフェや集会スペースの提供、ベースの維持・管理のほか、さいたま教区内の小教区から一泊二日ないし二泊三日で活動にあたるボランティアと一緒に、仮設住宅を訪問する出張交流カフェ活動に携わってきました。訪問する仮設住宅は、福島第一原発の爆発によって強制的に自宅から避難させられている大熊町と楢葉町からの被災者の住む仮設 8 か所でしたが、2014 年途中からは楢葉町役場の要請を受けて、新たに 2 か所の仮設住宅を訪問する事になり、毎週 5 か所の仮設を訪問し、計 10 か所の仮設を月に 2 回訪問する活動にあたりました。

2015 年後半からは、諸般の事情により、もみの木ベースでのカフェや集会スペースの提供を取りやめ、活動支援の事務所機能を維持しながら、仮設住宅への出張交流カフェに重点を置いた活動を継続してきました。



(写真左) 日立教会の方からプレゼントされた出張カフェ用幟旗



(写真右) 解体が進む高久第 1 仮設住宅 中央奥に「もみの木」が見える

「言葉を拾う」

東日本大震災発災以降のさいたま教区ともみの木の活動は記述したとおりですが、ベースを置いての 7 年間の活動はこの 3 月で整理することになります。

私がここで付け足して述べる事が出来るとすれば、2014 年 4 月以降に私の見て来た事柄についてです。この 4 年間、10 か所の仮設住宅にお住まいの方々と接してきました。私どもの教区のボランティアは、小教区で積極的に活動している信徒が中心ですが、多様で多数の

者がボランティア活動を通じての研修をさせていただいたとも言えるかもしれません。

仮設でのカフェ参加者は転出、転入等での入れ替わりもある訳ですが、毎月二回お会いする方もありますので、ボランティアや私とも親しくお話しいただけるようになった方も多くありました。

この様な時間の中で、私は避難生活をされている方々が“さり”とおっしゃった言葉に、この度の原発がもたらした途方もない被害を感じる場面が幾度かありました。これは、具体的に「この場面でのこの言葉」などと特定できないのですが、『言葉』はその人のその時の感情のままを記憶して発せられ、再現させることがある様に思われます。（劇作家などと言いますが、街に出で「言葉」を集め、それを並べて見るとその場の状況、背景等がわかってくるそうですし、まちづくりなどのワークショップで一般的になった K J 法——文化人類学者の川喜多二郎教授が考案した方法で、データをカードに記述して分類し、グループごとにまとめて考察していく方法——による単語からの問題点の洗い出しなども同根なのかもしれません。）

私には、その時のその言葉を受け止めることなど出来ないですし、そもそも、正しく聴いていたのかも定かではないのですが、その「言葉」はどのような思い、場面を再現し、またどのような感情を伴って発せられ、何を望んでいるのかを知る手掛かりになると思います。

原発被害は、震災被害ばかりではないと考えています。そして、ため息のように“さり”と発せられる「言葉」はその人々の中に澱（おり）のように存在しているものの現れのように思えます。

今後「言葉を拾う」場面をどのように用意できるのか。もみの木始末後の課題と思っています。



いわきサポートステーション「もみの木」全景



2 月 16 日に行われた全ベース会議時に参加者全員で
* 前列右から、もみの木ベース長 朝尾さん、大槌ベース 生利望美さん、
大槌ベース長 片岡英和さん、片岡典子さん、西館さつきさん

岩手・宮城・福島の実害公営住宅整備状況等の現状

※岩手県、宮城県、福島県の HP 参照。数値（県外への避難者数以外）は、2018 年 1 月末時点のもの。

【岩手県】

1. 災害公営住宅整備状況 建物完成率 90.7%（沿岸市域）
※内陸部にも災害公営住宅を建設予定だが、上記数値には含まれていない。
●未完成の市町村：釜石市、山田町、大槌町
2. 応急仮設住宅入居状況
（1）応急仮設住宅（建設分）
入居者数 5,955 人 供与戸数に対する入居率 28.7%
◇入居人数が多い市町村 ①釜石市②大槌町③陸前高田市
（2）みなし仮設住宅（民間賃貸・公営住宅等）※物件所在地市町村別
入居者数 1,803 人 入居戸数 745 戸
◇入居人数が多い市町村 ①釜石市②盛岡市③大船渡市
3. 県外への避難者数 1,234 人（2018 年 1 月 16 日現在）

【宮城県】

1. 災害公営住宅整備状況 建物完成率 95.6%
●未完成の市町村：石巻市、名取市、東松島市、女川町
2. 応急仮設住宅入居状況
（1）応急仮設住宅（プレハブ住宅）
入居者数 3,744 人 供与戸数に対する入居率 17.3%
◇入居人数が多い市町村 ①石巻市②女川町③気仙沼市
（2）応急仮設住宅（民間賃貸借上住宅分）※物件所在地市町村別
入居者数 4,069 人 入居戸数（契約件数）1,804 件
◇入居人数が多い市町村 ①石巻市②仙台市③名取市
3. 県外への避難者数 4,913 人（2018 年 1 月 16 日現在）

【福島県】

1. 災害公営住宅整備状況
（1）市町村災害公営住宅（帰還）等整備
子育て定住賃貸住宅 建物完成率 100.0%
再生賃貸住宅 86.0%（未完成：飯舘村）
災害公営住宅 63.6%
（未完成：浪江町、楡葉町、飯舘村）
（2）市町村災害公営住宅整備（地震・津波等被災者向け住宅）
建物完成率 100%
（3）復興公営住宅整備状況（原子力災害による避難者のための住宅）
建物完成率 88.4% ●未完成の市町村：いわき市、福島市
2. 応急仮設住宅入居状況
※2017 年 3 月 31 日をもって供与が終了した方の入居人数等は含まれていない。
（1）応急仮設住宅（プレハブ住宅）
入居者数 3,865 人 供与戸数に対する入居率 16.4%
◇入居人数が多い市町村 ①楡葉町②南相馬市③富岡町
（2）みなし仮設住宅（借上げ住宅・公営住宅等）
入居者数 10,124 人 入居戸数 5,142 件
◇入居人数が多い市町村 ①浪江町②富岡町③南相馬市
3. 県外への避難者数 34,202 人（2018 年 1 月 16 日現在）